HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	ブッカー・T・ワシントンとは何者か？ ― アメリカ黒人「保守」思想の「源流」をめぐる議論の再整理 ―
著者	大森，一輝; OMORI，Kazuteru
引用	年報新人文学(21)：160-179
発行日	2024-12-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

◉研究ノート

ブッカー・T・ワシントンとは何者か？

―アメリカ黒人「保守」思想の「源流」をめぐる議論の再整理―

大森　一輝

はじめに――今なぜ黒人「保守派」を取り上げるのか？

アメリカ合衆国で、黒人はいかにして「保守的」になるのだろう？ かつては奴隷として人間扱いされず、解放後も過酷な差別に晒され、今でも偏見を向けられる彼ら彼女らが、社会の変革ではなく「保守」、現状維持を願うとは、いったいどういうことなのか。

本稿は、ドナルド・トランプの支持者などに典型的に見られる（無自覚の）白人優越主義に対抗するために、黒人「保守主義」に関する歴史的把握の歪みを正そうとする試論である。

トランプ主義者は、自分たちは白人（そして男性）であるというだけで「ガラスの高下駄」を履かせてもらっているにもかかわらず、もはや差別などないのだから優遇政策に甘えるべきではないとマイノ

リティには徹底して「自助」を求め、それこそがアメリカの伝統だと言い募る（優遇されているのは自分たちなのに）。そうした発想を（奇妙なことに）共有する現代の黒人「保守派」が自分たちの「源流」と位置付けるのが、一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけて、南部の黒人に対する職業訓練教育を推進したブッカー・T・ワシントンなのである。

以下では、ワシントンの人生を概観したうえで、同時代の批評／後世の歴史家による評価をふまえて、彼がアメリカ社会をどのように見て何を「守ろう」としたのかを彼の言動から読み解き、現在も政治的磁場の中での毀誉褒貶によって覆い隠されている彼の思想の核心を捉え黒人解放思想史の中に位置付け直すことで、冷酷な自己責任論とは異なる彼の「保守主義」の可能性を再考する。

一　ブッカー・T・ワシントンの生涯と思想――彼はどのような時代を生きたのか？

ブッカー・トリヴァ・ワシントンは、ヴァージニアのさほど大きくない農場で、奴隷主家族の料理人だった黒人の母と白人の父親（詳細は不詳）との間に、一八五六年の春に奴隷として生まれた。南北戦争後は家族でウェスト・ヴァージニアに移り、仕事をしながら学校に通う。一六歳になると、黒人用の上級学校があるとの噂を聞きつけ、母親に背中を押され、ヴァージニア州ハンプトンに向かった。八〇〇キロの旅の途中で汽車賃は底をつき、残りは徒歩で（たまに通りすがりの馬車に乗せてもらい）、野宿を

しながら、創設四年目のハンプトン師範・農業学院に辿り着き、何とか入学を許可される。

ハンプトンでは、人格陶冶と規律訓練および実用教育の重要性を身をもって感じ、刻苦勉励の末一八七五年に卒業して、故郷で黒人学校の教師になる。しかし、数年後には母校から声がかかり、夜間学校の運営や新しく受け入れるようになった先住民用の寮監を任される。さらなる転機は一八八一年に訪れた。ハンプトンの学院長の紹介で、アラバマ州タスキーギに新設される黒人用師範学校に校長として赴任することになったのである。ところが、勇んで行った先には何もなく、文字通りゼロから学校を「作り上げて」いかなければならなかった。

ワシントンの努力で、タスキーギ師範・産業学院は順調に発展した（一九一五年に彼が亡くなるときには、二〇〇〇エーカーという広大な敷地に一〇〇の建物、二〇〇人近くの専任教員と一五〇〇人以上の学生を抱えるようになる）。それと歩調を合わせるかのように、ワシントン個人も穏健な黒人教育者としての名声を高めていく。

一八九五年九月にジョージア州アトランタで開催された綿花生産州国際博覧会の開会式に招かれ演説をしたワシントンは、人種混淆への怖れを牽制しながら、両人種の融和・協力を（白人と黒人は、社交的な場面では指のように離れているが、社会発展のためには手のように一つになれる、と）説いた。奴隷制がなくなったからこそ、あらためて過酷な人種による差別が横行するようになった当時の南部において、そうであっても（あるいは、そうであるからこそ）、拳を振り上げて政治的・社会的平等を求めるのではなく、骨身を惜しまず学び働くことで隣人の信頼を勝ち得ていくべきだ、権利はその後についてくる、という主張を黒人であるワシントンが打ち出したことは、穏やかな変化という名の現状維持を

求める白人有力者から熱烈に支持され、ワシントンこそが模範的な黒人指導者だとみなされるようになる。黒人たちからも文字通り立志伝中の人物として仰ぎ見られ、まさに模範＝ロールモデルとされた。そのことは、当時、毎年何百人もの黒人の子どもたちが「ブッカー・T」と名付けられ、多くの黒人家庭に彼の写真が飾られ、彼の名を冠した小中高校が全米各地に作られ存続していることからも明らかだろう。彼は、一九世紀末から二〇世紀初頭のアメリカで、いや、おそらく世界中で、もっとも有名な黒人であった(1)。

他方、北部で高等教育を受けた黒人たちは、ワシントンの態度を、節を曲げた妥協であり、当然の権利を自ら放棄する敗北主義だとして反発した。その急先鋒となったのが、ハーヴァード大学で学士号・修士号を取得した二人の黒人、W・E・B・デュボイスとウィリアム・モンロー・トロッターである。ドイツ留学を経て黒人として初めてハーヴァードから博士号を授与されたデュボイスは、一九〇三年に出版した『黒人のたましい』において、一章を「人として、アメリカ市民として、黒人が当然要求すべきことを取り下げさせようとする」ワシントンへの論難に費やし、「南北の融和が、産業における奴隷制（の事実上の復活）や黒人の市民としての存在の全否定のような兆候を示すようになり、……法律によって劣等な立場が固定されてしまうのなら……黒人は、愛国心と忠誠心の限りを尽くして」ワシントンに反対しなければならない、なぜなら「子どもたち――黒人であろうが白人であろうが――に不可避的に惨禍をもたらす種が蒔かれるのを見過ごす」わけにはいかないからだ、と述べた(2)。トロッターに至っては、自分が編集・発行する週刊紙『ガーディアン』で、屈従を説く（と彼には見えた）ワシントンを人種の指導者ならぬ敵として繰り返し嘲り、いかに自分のものとはいえ新聞という公器で、黒人はいく

ら真面目に働いたところで奴隷のままだった、奴隷解放をもたらしたのは白人・黒人の奴隷制廃止論者の言論の力だったのに、そのおかげで自分も自由人になれたのに、差別撤廃のための議論を封じ込めようとするとは「愚か者」だ、と罵ったのである[3]。

このように知識人からの批判はあったものの、世間的には地位を確固たるものにしたワシントンは、複雑な行動を取るようになる。南部では、金と職を差配することで黒人社会での自分の威信を高めつつ、北部で自分に敵対する地域や組織にはスパイを送り込み、黒人新聞等のメディアも操作して自分の威光と意向を維持しようとしたのだ。その一方で、水面下では、人種差別と闘う人や団体を支援したりもしていたものの、そのことは決して公にはしなかった。

その間に、アメリカは、人種によって絶望的に深く切り分けられようとしていた。黒人の進歩と「自由の国」の良心に期待するだけでは、いつまで経っても身の安全を確保することすらできないほどに（ワシントン自身も、一九一一年にニューヨークで不審者として白人男性に殴打され、被害者でありながら警察に連行される）。どれだけ訴えれば、いつまで待てば、自分たちは「アメリカ人」になれるのか、その答えを示さない（示せない）まま、次第に反差別の旗幟を鮮明にしつつあったワシントンは、一九一五年一一月、ニューヨークで倒れた後、本人の強い希望でタスキーギに搬送され、五九歳で帰らぬ人となった（本稿末に付した略年表を参照）。

二　ワシントン評価の変転――現実的な指導者か、人種の裏切り者か？

その死を悼む声が全国から寄せられたのとは対照的に[4]、死してなお非難の声は止まなかった。デュボイスは、自身が編集長を務める全国黒人向上協会の機関誌『クライシス』のワシントン逝去直後の号において、「厳しいかもしれないが公正に見れば、この人物にこそ、黒人の選挙権剥奪の完成、黒人用の大学や公立学校の衰退、肌の色によるカースト制度の厳格化、これらがわが国で起こったことの責任があると言わざるを得ない」と、追悼記事であるにもかかわらず、生涯を黒人の実業教育にささげたタスキーギ学院長を断罪した[5]。人種差別への順応を唱え、手に職をつけ僅かな財産を築くことだけを奨励し、権利の平等を求める闘いを抑えた「保守的」な人物として彼を描くこのような見方は、学問の世界では、時代を経るにつれて、むしろ強くなる。

アメリカ南部史の大家C・ヴァン・ウッドワードも同様の見解を踏襲し、ワシントンを、南部白人のみならず北部資本家の走狗であり、自由市場を信奉し不利な立場にいる黒人に初期条件を補正しないまま古いタイプの技能で競争を強いる（善意だとしても）非現実的な指導者だとみなした[6]。一九六〇年代に刊行され九〇年代まで版を重ねた代表的なアメリカ黒人史の概説書の一つは、ワシントンを次のように論評している。「黒人が従属的な位置にいることを（ワシントンが）明らかに黙認していたことは否定できなかった。彼は、白人の観点から物を見ていたのである[7]。」黒人思想史研究のパイオニアであるオーガスト・マイヤーや、ワシントンの残した膨大な量の手紙その他の文書の編纂に自ら携わ

り（一四巻本として出版された）それを基に二巻に及ぶ浩瀚な伝記を著したルイス・ハーランのように、民衆に寄り添いつつ可能な範囲で差別と闘う現実主義者としての側面にも目を向ける研究も現れたが[8]、結局のところ、白人に取り入って黒人社会を陰で操った権力者であり、効き目の怪しい処方箋を示し（結果的にではあれ）黒人同胞を白人に売り渡した裏切り者、失敗した黒人指導者だったというイメージは、（黒人の暮らしぶりが大きく上向くこともなく、日常生活でも屈辱を味わわされ、依然として投票には行けず、リンチと呼ばれる無法で残虐な殺人が横行したこともあって）長く続いた。

その見直しを迫ったのが、二〇〇九年にハーヴァード大学出版局から刊行されたロバート・ノレルの『歴史より身を起こして――ブッカー・T・ワシントンの人生』という評伝である[9]。ノレルは、黒人に職業教育を施すことで人種全体を経済的に向上させるという主張は、当時の南部においては極めて斬新であり、危険を伴うものでありながらもうまく攻撃をかわすことで、ワシントンは黒人民衆に（現実の政治経済状況の劇的な改善は無理でも）希望を与えたとする（その点を強調する）解釈を打ち出した。ノレルを引き継ぐような議論も現れている。政治思想（史）を専門とするマイケル・リチャーズは、二〇一九年の論考において、黒人が白人と対等なメンバーとして政治社会に参画するという共和主義的な理想を掲げ、黒人が立派な市民になれるという可能性と実例を示すことで改革を促した思想家としてワシントンを捉え直し、「ラディカル」な活動家とも敵対したのではなく彼なりのやり方で共に（そして、したたかに）闘った実務家として、黒人解放思想史・運動史の中でワシントンを正当に評価することを提唱している[10]。

三　現代の黒人「保守派」の主張――彼らはワシントンをどのように利用しているのか？

しかし、このようなワシントンの再評価は、容易に予想されるように、黒人「保守派」と呼ばれる人たちに政治利用される。保守系の論壇誌『ナショナル・レビュー』に掲載された書評は、ノレルが描くワシントン像を手放しで称賛し、実際の言動はワシントンそっくりなくせに大きな政府に国民を依存させようとする（と保守派には見える）当時の大統領バラク・オバマを批判しつつ（オバマも、ワシントンと同じように、対立を避け、白人を宥め、黒人の責任と希望を語った、という指摘は興味深いが、ここでは立ち入らない）、個人の自助努力を唱道したワシントンを誰もが見習うべきだと、「保守的」な価値観を彼に投影するのである[11]。

ワシントンは、本当に、彼を褒めそやす黒人「保守派」と同じような意味で「保守的」だったのだろうか？確かに、現状の（急激な）変革を求めない、という意味では、「保守的」なのだが、現代の「保守派」の特徴は、それ（だけ）ではなく、個人が政府に頼らず自力で成功を収めるべき、裏を返せば、失敗はすべて本人の能力・努力の不足という、冷酷な自己責任論にある。

代表的な黒人「保守派」として、二〇二四年夏現在、共和党所属の唯一の黒人連邦上院議員であるティム・スコット（副大統領候補になる可能性も取り沙汰されていたほどのトランプ支持者）の主張を見てみよう。彼は「アメリカに人種差別（的な出来事）はあるか？」と問いかけ、自らこう答える。「もちろ

んある。だが、この国のシステムは人種差別に染まっているか？ そんなことはない。」「アメリカとその夢は、生きている。素晴らしく、健全なものだ[12]。」

その「夢」を叶える方法として彼が強く打ち出しているのが、「学校自由選択」である[13]。貧困地区の学校ではなく（私立や宗教系の学校も含め）別の学校を選び、そこに通わせるための費用を公的に補助する制度だが、その効果については教育学の分野でも議論が分かれている[14]。ある種の「公助」ではあるが、それを地域の公立学校を改善するために使うのではなく、個々人が地域を見捨て脱出して良い学校に行くために配分するという発想は、教育における市場経済的な自由競争（学校間の競争という意味でも、個人間の競争という意味でも）至上主義であり、さらには、「自分さえよければ地域も同胞もどうなっても構わない」というトランプ主義の真骨頂でもある。

四　ワシントンの「保守」主義――彼は何をどのように「守ろう」としたのか？

このような現代の黒人「保守派」とワシントンには、多くの相違点がある。ワシントンは、自分一人ではうまく学べず職を得られない黒人を見捨てたりしなかった。そもそも、彼ら彼女らを助けるためにタスキーギ学院を作り、それをできるだけ拡大しようとしたのだから。そういう意味では、彼は「自助」を唱えたのではなく、「共助」を呼びかけたと言うべきだろう。また、彼は、政治的な権利の回復を最優

先とはしなかったが、政治力を行使しなかったわけではない。歴代四人の大統領（クリーヴランド、マッキンリー、T・ローズヴェルト、タフト）との個人的なパイプを活用して、（その選択が私情によって左右されることもあったとはいえ）かなりの数の黒人を政治任用職に就けていたのだから。この意味では、彼は、政府を頼らなかったのではなく、むしろ非公式に政府の支援を獲得していたのである。

さらに言えば、ワシントンを批判していた黒人知識人も、アメリカ社会の根本的な変革を求めなかった、という意味では、「保守的」だったと言える。トロッターなどは、アメリカ的な自由競争を前提に人種という概念の存在しない世界を目指していたし、デュボイスも、パン・アフリカニズムを経て最終的には共産主義者になるが、少なくとも二〇世紀初頭の時点では、「アメリカ人」としての完全な権利とその行使を保障せよと声を大にしていたのだから（もちろん、それは、当然かつ必要なことではあったのだが）。しかも、個人主義・能力主義という点では、トロッターや（初期）デュボイスのほうが現代の黒人「保守派」に近い[15]。

確かに、ワシントンも、泣き言を並べずに倦まず弛まず努力せよ、と黒人民衆に対して繰り返し説いた。その努力は必ず報われると確言して。しかし、彼は、それが空約束にならないよう、自らも皆にとって最善と思われる努力をした。リベラルあるいは「ラディカル」な黒人が、権利を回復した後は自分で実力を示して地位を上昇させるべきだと考え、黒人が団結する「共助」など必要のない、個人の「自助」だけでやっていける世の中にしようとした（その必然的な帰結として、自分が「黒人」と見られること自体を嫌った）のとは違って。ましてや、黒人であっても、負け犬は自分を責める外なく、他人を頼るべきではない（とりわけ、被害者の立場に安住して政府による過剰な保護＝「公助」を求めるべきでは

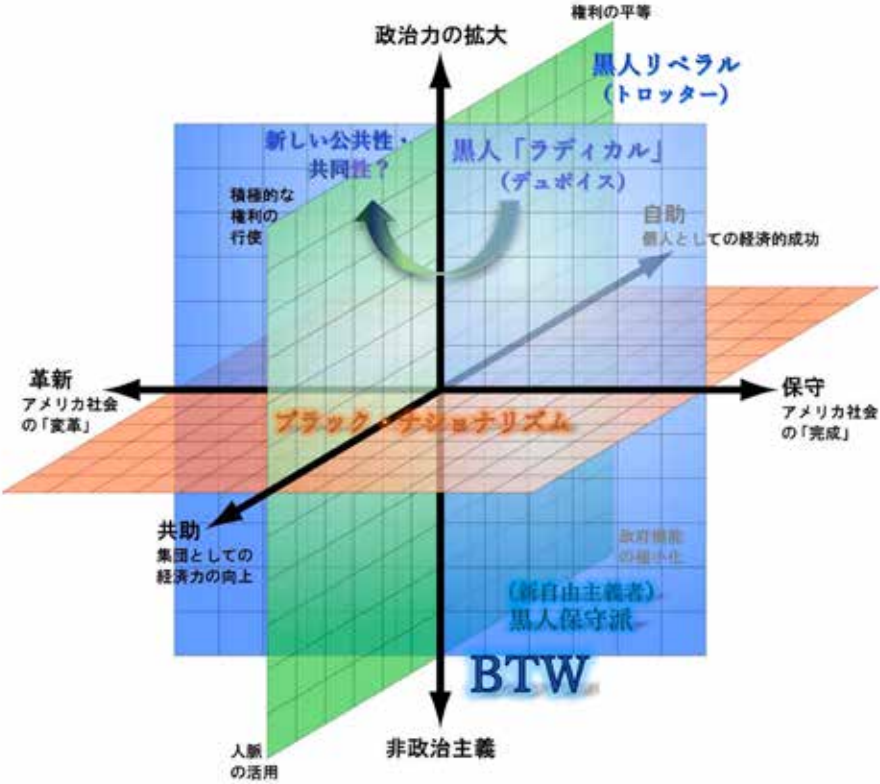
ない）という、現代の黒人「保守派」の信条とも、ワシントンの言動は大きく異なる。

以上のことを図示すると、次頁の図のようになる（筆者作成）。

ただし、これはワシントンが「保守的」ではなかった、ということを意味しない。彼は、黒人だけが不当に権利を制限されていることを誰よりもよく知っていながら、その撤回を政治課題としなかったのだから、十分に「保守的」だった。

表立って体制批判をしなかったワシントンが何としてでも守ろうとしていたのは、集団としての黒人の評判と生活だった。南部は、個々の黒人が、白人と何ら変わりのないアメリカ人として自力で勝ち上がっていくには、あまりに過酷な環境であり、北部での扇動は、彼の愛するタスキーギを、そして南部黒人全体を、危険にさらしかねないものだとしか彼には思えなかったからである。だからこそ、秘密裏に行っていた資金援助も、黒人には納税や読み書き能力を投票の条件としつつ白人には無条件で投票させる「祖父条項」違憲訴訟など、あからさまに人種別の理不尽な扱いに対する闘いを主な対象にした。仮に露見しても、「どの州であろうと、無知で貧しい白人には投票を許し、同じ条件の黒人に投票を許さないような法律を作るべきではない」「どのような資格審査があるにしても、両人種に公平に平等に適用されなければならない」[16] という年来の主張と齟齬をきたさず、むしろ、自分はアメリカの健全性を信じているのだ、と言えるから。

しかし、タスキーギ学院の卒業生のほとんどが堅実な生活をしていたにもかかわらず、それを目の当たりにしても南部白人は「人種秩序」にしがみつき、黒人から奪った権利を返して対等な仲間とみな



そうとしなかった。つまり、ワシントンの保守主義は戦略としても失敗したと言わざるを得ない。付言すれば、この図の右側は、アメリカ民主主義と自由主義経済の正当性を疑わないことが（つまり、必要なのはアメリカの継続あるいは完成であって、変革ではないことが）前提になっている。そういう意味では、こちら側にいる人たちは全員「保守的」である。この弱肉強食の格差社会（とその中の避難所としての黒人コミュニティ）の裏側（図の左側）にある（かもしれない）、

誰もが生活を保障され、違いを認め尊重し合う、なおかつ、デュボイスその他の黒人知識人が惹かれた既存の社会主義・共産主義とも、偏狭なブラック・ナショナリズムとも違う、別の世界の可能性を追求しようとしなかった／できなかったという意味でも[17]、ワシントンは（思索ではなく行動を旨とする人だったとはいえ）「保守的」だったと言わざるを得ないのである。

それでもそこに、強く「共助」を進めつつ、その立場からアメリカに変革を迫る可能性を読み取るのは牽強付会に過ぎるだろうか。単純な反差別論としての「人種ではなく私個人の能力を見てくれ！」という叫びとは異なる、「私たちの成果を見てくれ」という訴えは、「私たち」の範囲と「成果」を生み出す公的な基盤、その双方の拡張を要求することにつながり得るのだから。

おわりに――多様性を尊重する社会における差別と闘うために

ワシントンは、非の打ちどころのない偉大な指導者だったわけでも、かと言って、権力の亡者として白人至上主義者の手先に堕したダーク・ヒーローだったわけでもなかった。被害者を責めるような態度の黒人「保守派」が、彼を自分たちの思想の先駆者としてヒーローに祭り上げるのは、誤解あるいは意図的な曲解だと言うべきだろう。

ワシントンを評価するうえで留意すべきなのは、当時の南部黒人（のほとんどと言っても過言ではな

い）は、ワシントンが常々語っていた（白人との共存への期待はさまざまであったとしても）自立・自律への望みを共有していた、ということである。彼ら彼女らは、自分の足で立ち、自分で生活を律したいと強く願っていた[18]。ワシントンが、どれだけ「民衆と共にあり」、彼らを「指導」できていたのかについては、議論が分かれている[19]。彼の処方箋は、当然ではあるが、すべての人を救うことはできなかった。それでも、彼の事業は、実際に多くの黒人（タスキーギ学院で学んだ人だけでなく、タスキーギの卒業生に教わった子どもたちや一緒に働いた人々）を救い、彼の人生は、簡単には叶えられなくても、さらに多くの黒人のお手本になったことは間違いない。

しかしながら、この処方箋は、差別と貧困に囚われ、希望を潰されかかっていた人たちにとっても福音になったのだろうか？ 毎日聖書を読み、それをインスピレーションの源とし、信仰を自分の活動の中で実践しようとしていた（だが特定の教派には属さず独立を貫いた）ワシントンの言葉が、人種主義的な社会を直接的に変える力にはならなかったとしても、人種主義的な社会を変えたいと思う人々を励ますことはできたのか。この問いに、実証を重んじる歴史学の立場から答えることは困難である。思いを文字に残さなかった人々については、それを推し量り汲み取ることしかできない。

ワシントンの言動は、虐げられた人々にとって、希望の光だったのか、虚しい慰めにすぎなかったのか。いまだに偏見に塗れた警官にいきなり殺されるかもしれないというリアルな恐怖に晒されている二一世紀の黒人たちに、ワシントンの立身出世物語はどのように響くのか。

いや、考えるべきなのは、ワシントンの実践を、どうすれば今の私たちに響くものにできるのか、である。ワシントン以後の百年の試行錯誤の先に何を見るのか、何を構想するのか、が問われているのだ。

そこで鍵になるのは、「私たち」を縛らない（「〇〇人ならこう感じ考えるべきだ」ではなく、被差別体験を含め「〇〇人」としての様々な経験をグループの内外で広く共有し活かす）「新しい共同性」と、公共サービスの提供の責任を官が放棄し民間に押しつけるような、現代日本で上から説かれる「新しい公共」[20]とは質的に異なる、すべての人の生活をしっかりと社会全体で支えるための「新しい公共性」だろう。「助け合い」を本質とするワシントンの「保守主義」を創造的に受け継ぐとは、畢竟、恵まれない人への「公助」を縮小しようとする日米共通の傾向（いや、世界中での「自分（たち）だけファースト」）を乗り越えることに外ならないのだから。

〔付記〕本稿をまとめるにあたっては、二〇二四年二月六日に都留文科大学で行われた、大学院比較文化専攻主催の講演会での発表と質疑応答から大きな刺激を受けました。鋭い質問や重要な指摘をしてくださった当日の聴衆のみなさんに感謝します。

（おおもりかずてる　北海学園大学人文学部教授）

ブッカー・T・ワシントン略年表（一八五六～一九一五年）

一八五六年	ヴァージニア州のフランクリン郡に奴隷として生まれる
一八六一～六五年	南北戦争
一八六五年	母、兄、妹と共にウエストヴァージニア州モールデンに移住、製塩所で働く（断続的に学校に通う）
一八七二～七五年	ハンプトン師範・農業学院（黒人用の職業訓練学校）に入学し、優等生として卒業
一八七五～七七年	地元モールデンに戻り黒人学校の教師を務める
一八七八～七九年	ワシントンDCのウエイランド神学校（バプテスト系）に在籍
一八七九～八一年	母校ハンプトン学院で教える
一八八一年	アラバマ州タスキーギに創設された黒人用の教育機関であるタスキーギ師範・産業学院の校長となる（二五歳）
一八八二年	資金集めのために初めて北部各地を回る ファニー・ノートン・スミスと結婚
一八八三年	娘ポーシャ・マーシャル・ワシントンの誕生 連邦最高裁、人種差別を禁じた一八七五年の連邦公民権法に対して違憲判決を下す
一八八四年	妻ファニーの死 ハンプトン学院のアームストロング院長とタスキーギ学院のために北部各州で資金集めキャンペーン

一八八五年	オリヴィア・A・デイヴィッドソンと結婚
一八八七年	息子ブッカー・トリヴァ・ワシントン・ジュニアの誕生
一八八九年	息子アーネスト・デイヴィッドソン・ワシントンの誕生 妻オリヴィアの死
一八九〇年	南部での黒人からの選挙権剥奪が始まる
一八九二年	マーガレット・ジェイムズ・マレイと結婚
一八九五年	ジョージア州アトランタで開催された綿生産州国際博覧会の開会式で演説
一八九六年	ハーヴァード大学で名誉修士号を授与される 連邦最高裁、「分離すれど平等」であれば人種隔離は合憲であると判断
一八九八年	ウイリアム・マッキンリー大統領がタスキーギ学院を訪問
一九〇〇年	全国黒人実業連盟を設立 アンドルー・カーネギーから二万ドルの寄付（図書館建設用）
一九〇一年	自伝『奴隷より身を起して』を出版 セオドア・ローズヴェルト大統領とホワイト・ハウスで会食 ダートマス大学より名誉博士号を授与される
一九〇五年	ローズヴェルト大統領がタスキーギ学院を訪問
一九〇六年	カーネギー、タスキーギ学院を訪問、追加で六〇万ドルを寄付
一九一五年	タスキーギで死去（五九歳）

[註]

(1) ここまでの軌跡（として本人がゴーストライターに書かせたもの）である「自伝」は、何度も日本語に翻訳されてきたが、昨年、新訳が出た。佐柳文男・佐柳光代訳『奴隷より身を起して――ブッカー・T・ワシントン自伝』（新教出版社、二〇二四年）。本稿は、この新訳に寄稿した「解説」に加筆・修正を施したものである。

(2) W. E. Burghardt Du Bois, *The Souls of Black Folk*, Second Edition (Chicago: A. C. McClirg & Co., 1903), 50, 55-56. 木島始・鮫島重俊・黄寅秀訳『黒人のたましい』（岩波文庫、一九九二年）、七四、八〇―八一頁（訳文は変更した）。

(3) *Guardian*, 9 November 1901, 20 December 1902, 4 April 1903.

(4) Kenneth M. Hamilton, *Booker T. Washington in American Memory* (Urbana: University of Illinois Press, 2017), Chap. 4.

(5) "The Late Booker T. Washington," *Crisis*, Vol. 11, No. 2 (December 1915), 82.

(6) C. Vann Woodward, *Origins of the New South, 1877-1913* (Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1971), Chap. XIII.

(7) Benjamin Quarles, *The Negro in the Making of America*, Second Revised Edition (New York: Collier Books, 1987), 171-172. 明石紀雄・岩本裕子・落合明子訳『アメリカ黒人の歴史』（明石書店、一九九四年）、一一五頁。

(8) August Meier, "Toward a Reinterpretation of Booker T. Washington," *Journal of Southern History* 23 (May 1957), 220-227; Louis R. Harlan, *Booker T. Washington: The Making of a Black Leader, 1856-1901* (New York: Oxford University Press, 1972); idem, *Booker T. Washington: The Wizard Of Tuskegee, 1901-1915* (New York: Oxford University Press, 1983).

(9) Robert J. Norrell, *Up from History: The Life of Booker T. Washington* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 2009).

(10) Michael A. Richards, "Pathos, Poverty, and Politics: Booker T. Washington's Radically Reimagined American Civilization," *Polity* 51 (October 2019), 749-779.

(11) David T. Beito & Jonathan Bean, "A Strong Foundation," *National Review* (March 23, 2009), 37-40. ワシントンの歴史的評価の変転、その詳細については、次のレビュー論文を参照。Joshua Thomas Zeringue, "Booker T. Washington and the Historians: How Changing Views on Race Relations, Economics, and Education Shaped Washington Historiography, 1915-2010," MA Thesis, Louisiana State University, 2015. https://repository.lsu.edu/gradschool_the-

ses/1154

(12) Osita Nwanevu, “Tim Scott’s Message Was Fatally Flawed,” *New York Times*, 19 November 2023.

(13) アメリカ連邦上院のスコットの公式サイト（https://www.scott.senate.gov/）より。

(14) Mark Berends, “The Current Landscape of School Choice in the United States: What We Know, and Don’t Know about Vouchers and Charter Schools,” *Phi Beta Kappan* 103 (September 2021), 14-19.

(15) この点（特にトロッターと黒人「保守派」の親和性）については、次のものの第五章・第六章を参照。大森一輝『アフリカ系アメリカ人という困難——奴隷解放後の黒人知識人と「人種」』（彩流社、二〇一四年）。

(16)『奴隷より身を起して』、一七七、一七八頁。

(17) この難問は、公民権運動期にも引き継がれる（そして今を生きる私たちの）課題でもある。マーティン・ルーサー・キング・ジュニアは、ワシントンの方針について、「あまりにも自由のない現状とあまりにも希望のない将来」しか提示できなかった、と言ったが、返す刀で、デュボイスの戦術も「すべての人びと」を視野に入れていたわけではない「貴族的なエリート」のやり方だったと批判した。ただし、キングは、デクスター街バプテスト教会で自分の先任の牧師であったヴァーノン・ジョーンズが、ワシントンに賛同して「共助」（具体的には、農業から販売まで行う協同組合活動）を実践していたことを、好意的に紹介してもいる。さらに、最後の著作では、ワシントンの方法を否定するのではなく、自分はその不十分さを補っているのだとして、次のように説明したのである。「私は、彼（ワシントン）が、平穏を維持しようとして妥協した卑屈な黒人であったという見方を採りません。ワシントンの誤りは、構造的な悪の力の強さを過小に見積もっていた」ことであって、説得と実例だけでは白人を変えることができないのなら、「白人の良心に訴えるときにはいつでも、それと同時に非暴力の圧力を行使しなければならないのです。」キングも、人種主義が組み込まれてしまった「アメリカ」を、どこに向かって・どのように乗り越えるべきなのかを、差別との長い闘いの歴史をふまえて、模索していたのである。Martin Luther King, Jr., *Why We Can’t Wait* (New York: Harper & Row, 1964), 33. 中島和子・古川博巳訳『黒人はなぜ待てないか［新装版］』（みすず書房、二〇〇〇年）、三二頁（訳文は変更した）。King, *Stride Toward Freedom: The Montgomery Story* (New York: Harper & Row, 1958), 38. 雪山慶正訳『自由への大いなる歩み——非暴力で闘った黒人たち』（岩波新書、一九五九年）、三四頁。King, *Where*

Do We Go from Here: Chaos or Community? (New York: Harper & Row, 1967), 129. 猿谷要訳『黒人の進む道――世界は一つの屋根のもとに』(明石書店、一九九九年)、一三八頁（訳文は変更した）。

(18) Steven Hahn, "The Race Man," *New Republic* (November 4, 2009), 50-55.

(19) Pero Gaglo Dagbovie, "'Shadow vs. Substance': Deconstructing Booker T. Washington," in Dagbovie, *African American History Reconsidered* (Urbana: University of Illinois Press, 2010), Chap. 5.

(20)「『新しい公共』の考え方」内閣府ホームページ（https://www5.cao.go.jp/npc/attitude.html）。